

危ない橋を渡って…

原子トンネル反応研究グループ 黒 崎 讓

私が平成8年10月に博士研究員として原研に入所して以来、早いもので2年半以上が経過してしまった。そもそも私は大学院博士課程終了後、某中堅化学メーカーに就職し、つくば市にある研究所に約4年半の間勤務していた。会社では、研究成果はもちろん、どんなテーマで研究しているかということまで秘密にするのが普通である。研究テーマや成果を公表しなければ、他人に真似される心配はないが、他人からの批判にさらされる機会もなく自分の力がどの程度のものかわからなくなってしまうという危険なデメリットがある。私はこのままずっと会社にいれば、研究者としての自分のレベルが途方もなく下がってしまうような何か恐怖感に近いものを感じ始めていた。転職を具体的に意識し始めたのは、入社3年目頃だったと記憶している。今一度、大学か国立研究所で学問的な基礎研究をやりたいと強く望むようになった。当然のことながら世の中そんな甘いものではなく、全く思うように事は進まなかった。まず、会社の仕組み自体が中途退職者を不利に扱うようにできている。また、大学や国立研究所のパーマネントのポストなんてよっぽどのことがない限り中途では就けない。一つだけ朗報があった。当時、科学技術基本法の成立により、今後ポストクの人件費を大幅に増大していこうという気運が国内で高まっていた。ある時、日本化学会の“化学と工業”の求人欄に出ている原研の博士研究員募集の広告が目にとまった。正直言って原研のことはほとんど何も知らなかった私だが、とにかく問い合わせてみることにした。するとそこから意外なほど話しはスムーズに進み、幸運にも私は博士研究員として原研の先端基礎研究センターに採用されることとなった。パーマネントの職をなげうってわざわざポストクになるなんて、今から思えばずいぶん無謀なことをしたもののだが、結果的にはそれが正解だった。

原研に入り、研究環境は一変した。まず、計算機パワーがまるで違う。ここには計算機センターという組

織が存在し、スーパーコンピュータやワークステーションを数多く所有している。そして我々はそれらをほとんど無制限に使えるのである。また、この図書館は非常に充実しており大変助かっている。会社にいた頃は、雑誌があまり揃っておらず、仕事を終えた後しばしば筑波大学まで車を飛ばしたものであった。さらに、これは先端基礎研究センターに限って言えることなのかもしれないが、研究以外の雑務が非常に少なく、研究だけに十分な時間を割くことができる。このように書くと、会社に勤めていたことがマイナス面しかなかったように聞こえるが、決してそうとも言い切れない。一番大きいのは、給料のありがたさというもの。多少なりとも感じとれるようになったことではないだろうか。不況とは無縁の原研でこのことを感じている人はいったい何人いるだろうか？（と言ったらお叱りを受けそうだが…）さらに、研究ができる喜びというものも実感できるようになった。

今こうして原研で思う存分研究できるのも、そもそもは何のコネもなかった私を思い切って採用してくれたグループリーダーをはじめとする先端基礎研究センターの方々のおかげであり、深く感謝せずにはいられない。また、自由な雰囲気の中で研究をさせてくれたサブリーダーや優秀な同僚に恵まれたおかげで、原研に入所してからの約2年半は大変充実した研究生活を送ることができた。ちなみに、最近また幸運なことがあった。私が原研の関西研究所に中途採用されることになったことである。もちろんポストクの身であるから、大学等を対象に職探しはかなり頻繁に行っていたが、やはり相当な厳しさが感じられた。それだけに今回の採用決定を大変嬉しく思っている。思い返せば、かなり危ない橋を渡ってきたが、幸運が続いたことと周囲の人たちの励ましのおかげで、人生半ばにしてようやく職を得ることができた。本当の勝負はこれからと考え、今後さらにいい研究をしたいと思っている。